

2023 年度 看護学部 教育に関する点検・評価報告書

1. 入学者選抜に関する点検・評価(要約版)

1) 取り組み

(1) 選抜方法

- 本学部の入試においては、学生の他者への感情を言語化する力やコミュニケーション力に重点を置き、自ら考えて課題を解決する力を確認できる問題を取り入れている。また、看護職を目指すうえで必要な健康管理や、広い社会認識を確認する問題も取り入れている。看護師国家資格取得者及び取得予定者を対象とした保健師教育課程への編入制度の見直しを行った。

(2) 入学前課題への取り組み

- 合格者に対しては、大学への継続教育を目的に、入学前課題を提供している。合格時期により、1～3 課題を目安とし、論理的な文章表現、学生の考え方、学修姿勢、自己評価力などを確認している。提出課題ごとに、ルーブリック評価表をもとに自己評価を行い、自己の成長を自覚できる取り組みを行っている。提出された課題レポートは、2023 年度から、ルーブリック評価でコメント等の添削を行い合格者に返送している。入学後も、少人数制授業の基礎演習において継続的に活用しながら、個々の学生の状況把握と、対応を重視しながら支援している。

(3) 学習支援の取り組み

- 2023 年度は、GPA 評価・再試験回数・国家試験対策の模擬試験の結果等の情報をもとに、個別的・包括的・継続的な学習支援体制の継続を行った。個別対応のチューター制度(学習支援)、相談役としての学年担当の配置、GPA・模擬国家試験の成績による少人数制の学習支援・2 年次からの国家試験対策等の充実を図った。
- 1 年次後期から、1・2 次生を対象に自由参加での学習会(人体の構造と機能を中心)を月 2 回で計画し、学修意欲の継続が図られるように改善した。

2) 評価

(1) 選抜方法

- 選抜方法は、総合型選抜未来デザイン入試、学校推薦型選抜入試(ボランティア活動入試含む)、一般選抜入試、大学入試センター試験利用を設定している。選抜した結果の検証を行った結果、本学部の受験者の傾向は、高校における学修や意欲を評価する推薦型の希望が多い。推薦入試は、看護学部のアドミッション・ポリシーを反映しやすい入試形態である。また、総合選抜、推薦入試では、一定の学力水準を満たしていることを受験条件にして、出願書類(小論文含む)を確認し、さらにはそれらを総合的に見たうえで面接においてはそれぞれの要素における着眼点を面接評価に取り入れていることから、選抜方法は妥当といえる。
- 2023 年度の募集状況は、総合型選抜入試・学校推薦型選抜入試における落ち込み、一般入試 I 期・大学入学共通テスト利用 A B 日程の合格者のうち入学者が 3～2 割に留まっている。この時期の学生は、入学時のアンケート結果からも第 1 希望の国公立系の結果を受けてからの入学になっていた。

(2) 入学前課題への取り組み

- 2023 年度継続して入学前課題の提示時期は、従来通総合型選抜未来デザイン入試の合格者からすべての課題、提出時期を提示した。合格から入学までの学修意欲を継続させるために、その都度ルーブリック評価表を用いながらレポートの添削を実施していくよう改善した結果、入学予定者全員が期限までに課題を提出し、添削指導を受けた。

(3) 学習支援の取り組み

- 2024 年 3 月発表の看護師国家試験(第 113 回)の受験者は、2020 年の入学時 67 名に対し、卒業時 63 名(94%)であり、合格者は 50 名(79%)であった。国家試験不合格者 13 名の入試区分形態は、11 名が推薦入試入学者、2 名が一般入試入学者であった。

不合格者の入学後の1から4年生のGPAの推移を分析すると、13名中5名が平均2.1～2.5であった。13人中8名が平均1.6～1.8と低迷状態が継続していた。3年次後期からの実習・4年次前期からの卒業研究・就職活動など重複課題への対応が困難で、国家試験対策の学習に費やす時間も著しく少なかった。また、合理的配慮を必要とする健康上の問題を抱えている学生も数名おり、多様な学生への支援対策を検討していく必要があった。保健師国家試験（110回）は16名中14名が合格で、推薦入試7名、一般入試6名、センター入試1名であった。

- 2023年度、1・2年次を対象とした学習会は、10月～1月迄合計7回実施した。30分のミニテストと解説・学習相談を実施した。アンケートの回収数が12名と少なかったが、「学習会の内容が役立った」「今後も継続してほしい」等の意見が多数であった。2年次生は通常の授業課題で精一杯な状況で、後日ミニテストのみを自己学習するなどの対応が見られた。

3) 課題と改善

(1) 連携校・強化対象校への取り組み

- 2023年度一部の連携校からの入学生は、8名から14名に増加しているが、その他の連携校からの入学は、低迷している。教員の出前講義などのブックレットの見直しや保健師の就職率が高い点、助産師の進学者、就職先での研究活動への評価など看護学部PRポイントを見直して入学生の増加を図る。

(2) 編入学者・社会人入学者募集の推進

- 保健師教育課程の編入学者の試験評価を小論文8割・面接2割を各5割の配分に変更し、入学前の看護教育機関での単位を一括認定する等入試基準の見直しを行った。看護専門学校などへのPRを進める。オープンキャンパスなどで社会人入学者の相談を受ける機会があるため、高校訪問時、卒業生へのPRの依頼やハローワークでの再就職の検討で資格を得たいという人へのPRを行う(就職支援の対象校としてのPR)。

(3) 新たな「学修・生活支援」体制の整備

- チューターによる早期からのマンツーマン指導、国家試験対策委員会と連携した手厚い学習指導・生活改善を含めた学習計画指導の3本柱で国家試験対策を強化する。低学年からの国家試験対策として、2～4年生が「解剖ノート」のサブ教材を購入し、年間9回のチェック日に自己学習の進捗状況を確認し学習支援を行う。学務委員会からのGPA情報の早期共有冬季休業中の成績低迷者への強化対策などを行う。学習計画や、生活習慣を可視化し、(アルバイト・学習時間の確報)前期・後期で見直しの支援を行う。

(3) ピアサポート環境の整備。

- チューター制度における異学年交流の機会を充実させる。(実習前・卒業時・学祭等の企画)学祭における看護学部のブースを確保し、チューター毎での異学年による企画の運営などを支援する。卒業時、国家試験対策委員の在校生への情報提供の機会を作り、最終学年のイメージが図れるように支援する。オープンキャンパスの学部紹介・模擬授業への協力など、異学年が担えるよう調整し継続が図られるよう支援する。

(4) 低学年対象の人体の構造と機能に関する学習会の継続

2024年度から2～4年次生に国家試験対策として解剖ノートのサブ教材を購入させ、学習の状況の確認や学習相談を行うため、主に1年生を対象に、後期～学習会を継続していく。特に、前期成績が低迷している学生の参加を促していく。

(5) 地域との連携活動への参加

- 弘前市との連携事業(街中キャンパス)、「認知症カフェ」など地域での取り組みに参加できるよう支援する。

1.入学者選抜に関する点検・評価（詳細版）

はじめに

2023年度入学者受け入れ方針(アドミッションポリシー)8項目の文語を理解しやすく、重複をさけた4項目に改正した。入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)と、本学部の入学者選抜の在り方について検証する。

1-1 入学者選抜について

1) アドミッション・ポリシー

看護学部は、建学の精神である「畏神愛人」に基づく豊かな人間性と教養を備え、科学的根拠に基づいた看護実践能力を養うことで、人々の健康に広く寄与できる人材育成を目指していることから、以下に掲げる資質や意欲を有する人を求める。

- (1) 入学後の学修に必要な基礎学力を身につけている人
- (2) 物事を色々な側面から考え、自分の意見を他者に伝えることができる人
- (3) 意欲を持ち、周囲と協力して課題解決に向けて行動できる人
- (4) 自分の心と身体に向き合い、健康管理ができる人

2) 選抜方法

- 総合型選抜未来デザイン入試、学校推薦型選抜入試(ボランティア活動入試含む)、一般選抜入試、大学入試センター試験利用入試の4種を設定している。これらを組み合わせて、多様な資質を持つ人を求めている。ポリシーと入試形態は以下のように関連付けられている。
- 第1に、本学の入試の選抜方法として、総合型選抜未来デザイン入試、学校推薦型選抜入試(ボランティア活動入試含む)を重視している。4年間の学業継続において、「看護師になりたい」という明確な入学動機は「やり抜く力」に大きく影響する。面接を通して学生の目標や人間性、コミュニケーション力や他者との関係性等の姿勢を重視している。
- 第2に、一般入試等の試験においては、日本語の能力を重視している。自己の考えを他者に伝える言語力・医療チームで共有する看護記録の正確で分かり易い文章表現力などを達成できる素地を身につけていることが望ましい。また、多様な価値観や幅広い社会認識等に興味・関心を持っていることを確認するため、出題内容と関連させた面接内容を考慮している。
- 第3に、個々の受験生の内申書や、入学前課題の提供により、自己の健康管理や生活態度、学習への意欲なども大切にしている。
- 第4に、入学前課題のレポートは、入学後の基礎演習による少人数制の教育場面で活用されている。入学前のレポートと基礎演習でのレポートをループリック評価表を用いてその成長を可視化することで、自己の成長や課題が明確になることにつながり、継続的な取り組みの効果が見られる。

1-2 選抜の結果と点検・評価（表1・表2）

1) 入試形態別の卒業生

2020年度入学生67名のうち、退学者は1名一般入試、留年者は1名推薦型入試者であった。卒業生は65名(前期卒業1名含む)であった。

● 表1. 入試形態別の卒業生・留年者

入試形態	入学時学生数	退学者	留年者
推薦型入試	47	0	1
一般入試	18	1	0
センター入試	2	0	0

2) 入試形態別の国家試験の成果

2020年度入学生67名、卒業時65名のうち「2024年3月発表度看護師国家試験(第113回)」の受験は、進路変更等により2名が未受験で合計63名の受験であった。その結果は、看護師国家試験の不合格者13名であった。内訳は、11名が推薦型入学者、2名が一般入試入学者であった。保健師国家試験(110回)は16名中14名が合格で、推薦入試7名、一般入試6名、センター入試1名であった。

●表2. 入試形態別の看護師及び保健師国家試験の合否者

入試形態	卒業時学生数	看護師国家試験不合格者	※保健師国家試験合格者
推薦型入試	46	11	7
一般入試	17	2	6
センター入試	2	0	1

1-3 まとめと課題

1) 取り組み

(1) 選抜方法について

- 本学部の入試においては、学生の他者への感情を言語化する力やコミュニケーション力に重点を置き、自ら考えて課題を解決する力を確認できる問題を取り入れている。また、看護職を目指すうえで必要な健康管理や、広い社会認識を確認する問題も取り入れている。

(2) 入学前課題への取り組み

- 合格した受験生に対しては、大学への継続教育を目的に、入学前課題を提供している。合格時期により、1~3課題を目安とし、論理的な文章表現、学生の考え方、学修姿勢、自己評価力などを確認している。提出課題ごとに、ルーブリック評価表をもとに自己評価を行い、自己の成長を自覚できる取り組みを行っている。提出された課題レポートは、2023年度から、ルーブリック評価でコメント等の添削を行い合格者に返信している。入学後も、小人数制授業の基礎演習において継続的に活用しながら、個々の学生の状況把握と、対応を重視しながら支援している。

(3) 学習支援への取り組み

- 2023年は、GPA評価・再試験回数・国家試験対策の模擬試験の結果等の情報をもとに、個別的・包括的・継続的な学習支援体制の継続を行った。個別対応のチューター制度(学習支援)、相談役としての学年担当の配置、GPA・模擬国家試験の成績による小人数制の学習支援・2年次からの国家試験対策等の充実を図った。
- 1年次後期から、1・2次生を対象に自由参加での学習会(人体の構造と機能を中心)を月2回で計画し、学修意欲の継続が図られるように改善した。

2) 評価

- 選抜方法は、総合型選抜未来デザイン入試、学校推薦型選抜入試(ボランティア活動入試含む)、一般選抜入試、大学入試センター試験利用を設定している。選抜した結果の検証を行った結果、本学部の受験者の傾向は、高校における学修や意欲を評価する推薦型の希望が多い。推薦入試は、看護学部のアドミッション・ポリシーを反映しやすい入試形態である。また、総合選抜、推薦入試では、一定の学力水準を満たしていることを受験条件にして、出願書類(小論文含む)を確認し、さらにはそれらを総合的に見たうえで面接においてはそれぞれの要素における着眼点を面接評価に取り入れていることから、選抜方法は妥当といえる。
- 入学者の入学後の学修状況や追跡調査を行った結果、2020年度入学生67名のうち、退学者は1名、留年者は1名でいずれも推薦型入試者であった。卒業生は65名であった。また、2020年度入学生67名のうち、「2024年3月発表の度看護師国家試験」の結果は、看護師国家試験の不合格者13名で、推薦型入学者11名、一般入試入学者が2名であった。保健師国家試験は16名中14名が合格で、推薦入試7名、一般入試6名、センター入試1名であった。
推薦型入試者の看護師国家試験の不合格者が多い結果については、1~4年次までの成績の推移などを分析していく必要がある。保健師国家試験の合格者に、一般入試、センター入試での入学生が含まれていることは、多様な形態での入試選抜が効果を奏していると考えられる。2年次後期までの成績の結果で保健師課程へ受験の可否が決定する為、入学時の目標と、成績の推移に応じた学習支援の検討が必要といえる。

3) 課題と改善

(1) 連携校・強化対象校への取り組み

- 2023年度一部の連携校からの入学生は、8名から14名に増加しているが、その他の連携校からの入学は、低迷している。教員の出前講義などのブックレットの見直しや保健師の就職率が高い点、助産師の進学者、就職先での研究活動への評価など看護学部PRポイントを見直して入学者の増加を図る。

(2) 編入学者・社会人入学者募集の推進

- 保健師教育課程の編入学者の試験評価を小論文8割・面接2割を各5割の配分に変更し、入学前の看護教育機関での単位を一括認定する等入試基準の見直しを行った。看護専門学校などへのPRを進める。オープンキャンパスなどで社会人入学者の相談を受ける機会があるため、高校訪問時、卒業生へのPRの依頼やハローワークでの再就職の検討で資格を得たいという人へのPRを行う(主食支援の対象校)。

(3) 新たな「学修・生活支援」体制の整備

- チューターによる早期からのマンツーマン指導、国家試験対策委員会と連携した手厚い学習指導・生活改善を含めた学習計画指導の3本柱で国家試験対策を強化する。低学年からの国家試験対策として、2～4年生が「解剖ノート」のサブ教材を購入し、年間9回のチェック日に自己学習の進捗状況を確認し学習支援を行う。学務委員会からのGPA情報の早期共有冬季休業中の成績低迷者への強化対策など行う。学習計画や、生活習慣を可視化し、(アルバイト・学習時間の確報)前期・後期で見直しの支援を行う。

(3) ピアサポート環境の整備。

- チューター制度における異学年交流の機会を充実させる。(実習前・卒業時・学祭等の企画)学祭における看護学部のブースを確保し、チューター毎での異学年による企画の運営などを支援する。卒業時、国家試験対策委員の在校生への情報提供の機会を作り、最終学年のイメージが図れるように支援する。オープンキャンパスの学部紹介・模擬授業への協力など、異学年が担えるよう調整し継続が図られるよう支援する。

(4) 低学年対象の人体の構造と機能に関する学習会の継続

2024年度から2～4年次生に国家試験対策として解剖ノートのサブ教材を購入させ、学習の状況の確認や学習相談を行うため、主に1年生を対象に、後期～学習会を継続していく。特に、前期成績が低迷している学生の参加を促していく。

(5) 地域との連携活動への参加

- 弘前市との連携事業(街中キャンパス)、「認知症カフェ」など地域での取り組みに参加できるよう支援する。

2. 教育課程・カリキュラムに関する点検・評価（要約版）

1) 取り組み

- 本学の教育理念、建学の精神、教育目標の実現を図るための科目として、「教養科目」「看護基礎科目」「看護実践科目」「臨地実習」及び「保健師教育課程」を設置している。2023年度は、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成を図るための、カリキュラム・ポリシーの連動を分かり易い文語に整理した。
- 「看護実践科目」では、グループワークやディスカッション、ディベート、プレゼンテーション等の『アクティブラーニング』を積極的に取り入れ、学士力・社会人基礎力を培っている。
- 第5次カリキュラム改正を受け、2022年度入学生からは新カリキュラムとなり、「多職種と協働する能力」「地域・家族をみる能力」を強化するための科目として「プライマリヘルスケア実習Ⅰ」「健康づくり実習Ⅰ」を1年次前期に配置した。さらに、「プライマリヘルスケア実習Ⅱ」「健康づくり実習Ⅱ」を3年次後期に配置した。

2) 評価

(1) カリキュラムの見直しについて

- 2022年度入学生からの新カリキュラムは厚生労働省が示す「保健師助産師看護師看護学校養成所指定規則」を満たしているが、第5次カリキュラムで見直しを指摘されている「臨床判断能力等に必要な基礎的能力強化のため解剖生理学等の内容を充実」については着手出来ていない。臨床判断能力は臨地実習においても援助を組み立てる根拠となる重要な能力であり、今後の検討が必要とされる。
- 2023年度「学修行動・学修成果アンケート調査」によると問21「本学の建学の精神について知っていますか」知らない・あまり知らない69.9%（看護学部）、問22「シラバスに記載されているCP・DPとは何かを知っていますか」知らない・あまり知らない70.4%（看護学部）と、知らない・あまり知らないと答えた学生は他学部と比較して多い傾向が見られた。カリキュラムや各科目内の教育内容は建学の精神やCP・DPは意識して構成されているものであるが、今後、学生に対する啓発と情報提供が必要とされる。さらに、学生にとってもわかりやすいCP・DPの検討が必要とされる。

(2) 学修行動・学修成果について

- 「授業出席の割合」は91%と3学部で最も多かった。定期試験受験資格が出席3分の2以上という規定があることや、毎回の出席確認は各科目で行われているため、授業へ出席するという基本的な学修行動はとれている学生が大多数であると言える。
- 「1週間当たりのレポート・課題に費やした時間」について90分以上は93%であり、「やっていない」学生は2.1%であった。

(3) 授業改善・学習サポートについて

- 2023年度FD研修会では、看護学部内の全教員が「ティーチングポートフォリオ」の作成に取り組み教育の質向上が図られた。2023年6月に看護学部1～3年生を対象に実施した、「学習サポートに関する調査」の結果では、学習サポートを目的とした講義や勉強会、質問の時間などがあれば参加を希望する学生は64名（83.1%）であった。特に看護援助の根拠となる「人体の構造と機能」に関する学び直しの機会を作る必要があると考え、2023年後期から、1・2次生を対象に自由参加での学習会（人体の構造と機能を中心）を月2回で計画し、学修意欲の継続が図られるように改善した。

3) まとめと課題

- 2022年度の新カリキュラム導入に際して、アクティブラーニングを積極的に取り入れ、受け身ではなく能動的な学びを促進してきた。取り組むことができている学生がいる一方で、予習・復習・課題の時間の確保が難しく、全くできていない学生も存在している。
- カリキュラムの検討に加え、授業内容の充実や見直し等も行うにあたって、ティーチング・ポートフォリオ、ラーニング・ポートフォリオ、ルーブリック評価の導入を進めていく必要がある。
- 学生が学ぶにあたり、本学部のディプロマ・ポリシー、その達成に向けたカリキュラム・ポリシーを学生にもわかりやすい表現に工夫したが、達成度の評価が課題といえる。

2. 教育課程・カリキュラムに関する点検・評価（詳細版）

はじめに

2023年度文語の見直しなどを行った、本学部の教育課程・カリキュラムのあり方について、教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）をふまえて検証する。

2-1. カリキュラム・ポリシーとカリキュラム編成について

本学の教育理念、建学の精神、教育目標の実現を図るための科目として、「教養科目」「看護基礎科目」「看護実践科目」「臨地実習」及び「保健師教育課程」を設置している。2023年度は、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成を図るための、カリキュラム・ポリシーの連動を分かり易い文語に整理した。

—教育課程編成・実施の方針—

- (1) 多様な知識、多様な文化や価値観を理解するため、「人間と文化・社会」「人間と言語」「人間と自然科学」「総合科目」から構成する『教養科目』を設置する。
- (2) 必要な人体や病態を理解する専門科目の基盤として、「人体の構造と機能」「疾病の成り立ちと回復の促進」「健康支援と社会保障制度」の科目を『看護基礎科目』として設置する。
- (3) 看護を実践するための基本となる能力、看護ケアの展開能力、看護実践の中で研鑽する能力を修得するために、「看護の実践」「看護の統合」「臨地実習」などを体系的に学修できるように『看護実践科目』を設置する。
- (4) 保健師教育は選択制である。看護師、保健師はそれぞれの専門性と必修科目を2年次に、保健師選択の科目および相互の連携共同に関する科目を3年次に『保健師教育課程』配置する。
- (5) 初年次教育から卒業後に向けての準備までの体系的キャリア教育プログラムに基づいた科目を配置する。

—教育方法と評価方法—

- (1) 大学における学修への円滑な移行を促すため初年次教育に関する科目を配置し、主体的学修への転換を図り、自ら探求する姿勢を育成する。
- (2) 3つのポリシーに照らした大学の取り組みの評価については、PDCAサイクルで行う。
- (3) 教育方法として、主体性とコミュニケーション能力を育成するために、地域活動および授業内での共同学習といった、多様で互恵的な学びの機会を設ける。
- (4) 各科目の内容に応じた適正な評価方法をシラバス（授業計画）に明記し、「姿勢・態度」「知識・技術」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」など様々な視点から学修成果の評価を行う。また、標準化された学習目標の到達度を適用し、専門職として必要な能力を評価する。

- 「看護実践科目」では、グループワークやディスカッション、ディベート、プレゼンテーション等『アクティブラーニング』を全科目で積極的に取り入れ、学士力・社会人基礎力を培っている。
- 第5次カリキュラム改正を受け、2022年度入学生からは新カリキュラムとなり、「多職種と協働する能力」「地域・家族をみる能力」を強化するための科目として「プライマリヘルスケア実習Ⅰ」「健康づくり実習Ⅰ」を1年次前期に配置した。さらに、「プライマリヘルスケア実習Ⅱ」「健康づくり実習Ⅱ」を3年次後期に配置した。

2-2. 点検・評価

2024年3月に実施された『2023年度学修行動・学修成果アンケート調査実施結果報告書』および2023年6月に看護学部学務委員会が実施した『学習サポートに関する調査』から、カリキュラムの見直し、学修行動・成果について評価した。

1) カリキュラムの見直しについて

- 2022年度入学生からの新カリキュラムは厚生労働省が示す「保健師助産師看護師看護学校養成所指定規則」を満たしているが、第5次カリキュラムで見直しを指摘されている「臨床判断能力等に必要

な基礎的能力強化のため解剖生理学等の内容を充実」については着手出来ていない。臨床判断能力は臨地実習においても援助を組み立てる根拠となる重要な能力であり、今後の検討が必要とされる。

- 2023年度「学修行動・学修成果アンケート調査」によると問21「本学の建学の精神について知っていますか」知らない・あまり知らない69.9%（看護学部）、問22「シラバスに記載されているCP・DPとは何かを知っていますか」知らない・あまり知らない70.4%（看護学部）と、知らない・あまり知らないと答えた学生は他学部と比較して多い傾向が見られた。カリキュラムや各科目内の教育内容は建学の精神やCP・DPは意識して構成されているものであるが、今後、学生に対する啓発と情報提供が必要とされる。さらに、学生にとってもわかりやすいCP・DPの検討が必要とされる。

2) 学修行動・学修成果について

(1) 出席などについて

- 「1週間の登校日数」は5～6日が75.26%と3学部では最も多く、7日と答えた者も6.2%であった。看護学部は必修科目が多く、非常勤講師の講義は土曜日に開講される場合があることや、授業がない場合にも各科目の課題や臨地実習の事前学習等で登校する学生が多いと考えられる。
- 「授業出席の割合」は91%と3学部で最も多く、89%は「理由がなく欠席した授業」が2割に満たないと回答していた。定期試験受験資格が出席3分の2以上という規定があることや、毎回の出席確認は各科目で行われているため、授業へ出席するという基本的な学修行動はとれている学生が大多数であると言える。

(2) 授業などについて

- 「興味・関心のある授業」の割合は80%以上とする学生は13.1%と3学部でも比率が高い。
- 「授業の難易度」では「やや難しい」「かなり難しい」を合わせると48.9%であり、3学部で最も高い。学年進行によって専門科目は多くなるが、各看護学を学ぶにあたっては1・2年次に履修する「人体の構造」「人体の機能」「病態論Ⅰ～Ⅳ」「病理学」「薬理学」等の基礎医学知識が根拠となる。1・2年次科目の理解が不十分なことによって、3・4年次の看護援助論や臨床実習での躓きに繋がる可能性も考えられる。
- 「授業に対する積極的な取り組み」については「よく取り組んだ」「かなり取り組んだ」を合わせると53.1%であった。看護専門科目ではほとんどの科目でアクティブラーニングを取り入れていることから、学生が主体的に授業に参加する環境は整えられている。

(3) 予習・復習などについて

- 「1週間当たりの自発的な授業の予習」については90分以上が41%であるが、「やっていない」とする学生も16.6%であった。授業の方法や課題によっても異なるものの、学習効果を高めるためにも具体的な予習の課題提示が必要となる。
- 「1週間当たりの自発的な授業の復習」については90分以上が44.8%、「やっていない」16.6%と「予習」と同様の傾向となった。

(4) レポート・課題への取り組みについて

- 「1週間当たりのレポート・課題に費やした時間」について90分以上は55.8%であり、「やっていない」学生は2.1%であった。他学部と比較して同様の比率ではあるものの、提出を求められている課題を提出できていない学生が2%おり、その後の学習にも支障をきたしている可能性がある。課題に取り組む際に困難となっていることを具体的に把握する必要がある。

3) 授業改善・学習サポートについて

(1) 授業改善について

- 授業評価アンケートの結果を参考に授業内容の改善を図る。
- 2023年度FD研修会では、看護学部内の全教員が「ティーチングポートフォリオ」の作成に取り組み、教育の質向上が図られた。
- 基礎演習をはじめとする演習科目ではルーブリック評価も導入され、その効果についての評価も行う必要がある。
- ラーニング・ポートフォリオの早期導入を図り、学生個々の学修状況に応じた指導やサポート体制について検討する必要がある。

(2) 学習サポートについて

- 2023年6月に看護学部1～3年生を対象に実施した、「学習サポートに関する調査」の結果で

は、学習サポートを目的とした講義や勉強会、質問の時間などがあれば参加を希望する学生は 64 名 (83.1%) であり、学習サポートを行う場合の方法としては、「1. 教員からの講義」「2. 座談会のような勉強会」「3. 教員に対する質問時間を設ける」「4. 上級生への質問時間を設ける」の 4 項目を複数回答で答えてもらったところ、2 の座談会のような勉強会と答えた割合がやや多かったが、4 項目ともそれぞれに 20%以上の割合で希望があった。

- 4 年生については国家試験対策委員会で 3 年次後期から模試や学習会の機会を設けているが、1・2 年生についても今後の学修の躓きを最小限にするためにも、特に看護援助の根拠となる「人体の構造と機能」に関する学び直しの機会を作る必要があると考え、2023 年後期から、1・2 次生を対象に自由参加での学習会(人体の構造と機能を中心)を月 2 回で計画し、学修意欲の継続が図られるように改善した。

2-3. まとめと課題

2022 年度の新カリキュラム導入に際して、アクティブラーニングを積極的に取り入れ、受け身ではなく能動的な学びを促進してきた。取り組むことができている学生がいる一方で、予習・復習・課題の時間の確保が難しく、全くできていない学生も存在している。また、カリキュラムの検討に加え、授業内容の充実や見直し等も行うにあたって、ティーチングポートフォリオ、ラーニング・ポートフォリオ、ルーブリック評価の導入を進めていく必要がある。さらに、学生が学修を進めるにあたり、本学部のディプロマ・ポリシー、その達成に向けたカリキュラム・ポリシーを学生にもわかりやすい表現に工夫したが、達成度の評価が課題といえる。

2025 年度 3 月は、カリキュラム改正の学生が卒業を迎える。2024 年度カリキュラム評価の研修会を企画しているが、卒業時迄、段階的な見直しと評価を進めていくことが課題である。さらには、就職先での客観的な評価が受けられるよう、臨地実習教育会議などでの機会を活用し、実習先に就職した卒業生の特徴・問題点などをインタビューなどの基礎調査を行って、段階的な評価につなげていく必要がある。

2-4. 2025 (R7) 年度教育課程編成について

- 2022 年度看護師教育課程の新カリキュラム導入により、実習編成は、1 年次から地域で生活している人の健康を理解する「健康づくり実習Ⅰ」病や障害を持ちながら地域で生活している人の思いや生活状況を理解する「プライマリヘルスケア実習Ⅰ」病院で療養生活をしている人への基礎的な看護を理解する「基礎実習Ⅰ」となっている。2 年次の「基礎実習Ⅱ」、3 年次後期から 4 年次前期の「成人・老年・小児・母性・精神・在宅看護実習」「地域看護学実習」「健康づくり実習Ⅱ」「プライマリヘルスケア実習Ⅱ」が終了する。これらの評価を行い、2026 年度に向けた実習の再編成を行う予定である。
- 2022 年度看護師教育課程の新カリキュラム導入により、新設した科目の評価を教育理念・3 つのポリシーと関連づけ実施していく予定である。

これらの評価を進めるにあたり、カリキュラム評価のスペシャリストを招き、9 月に研修を予定している。研修後、研修内容の確認、教育理念と科目の構成などの検討に向け、2024 年度後期・2025 年度の日程等の計画を立て進めていく予定である。

3. 学修成果に関する点検・評価（要約版）

1. ディプロマ・ポリシーと学部教育の達成度について

- 看護学部の2023年度までのディプロマ・ポリシー（旧ディプロマ・ポリシー）は学力の3要素である「姿勢・態度」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」のそれぞれの視点から7項目が設定されている。2023（令和5）年度 弘前学院大学「卒業時アンケート調査」実施結果報告書の結果から、本学部の学生は、卒業時においてディプロマ・ポリシーを概ね達成できていると考えている。また、2018年度（15N生）から2023年度（20N生）にかけて、知識・技能・能力などが身についたと考える学生が増加している。

2. 学修成果の評価

- 「教育理念（建学精神）」については、「知らない」と「あまり知らない」を選択した学生の割合（約70%）が多い。
- シラバスに記載されているカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを「知らない」または「あまり知らない」学生が多い。
- 幅広い知識や教養が、身に付いていないと考える学生の割合が増加傾向である。
- 企画・アイデアなどの創造力が身に付いたと考える学生の割合が増加傾向にある。
- 事前事後学修を行うための時間があるにも関わらず、事前事後学修の時間が少ない。
- 看護師国家試験合格率（新卒）は2022年（17N生）以降、低下している。
- 知識・技能・能力などが身についたと考える学生が増加しており、また成績（GPA）がよくなっているにも関わらず、看護師国家試験合格率（新卒）は低下している。

3. 課題

- 教育理念（建学精神）やカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーについて、これまで以上に理解を促す必要がある。
- 学生の事前事後学修時間が少ないため、自発的な学習を促すこと、または各授業においてこれまで以上の課題を課すことも考える必要がある。
- 知識・技能・能力などが身についたと考える学生が増加しており、また成績（GPA）もよくなっているが、看護師国家試験合格率（新卒）は低下している。この原因について、GPA以外の学修成果の評価指標も用いて検討する必要がある。

3. 学習成果に関する点検・評価（詳細版）

看護学部の学修成果について、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえて検証する。

3-1. ディプロマ・ポリシーと学部教育の達成度について（資料：2023年度学生便覧、2018年度から2023年度卒業時アンケート調査）

看護学部においては、キリスト教主義精神による人間観に基づいた生命の価値、人間の尊厳について理解し、看護専門職を目指すものとして、常に倫理的姿勢を持ち、人々に関心を寄せるケアリングの実践者としての態度を身につけているとともに、高度の看護知識と技術に基づく科学的な看護実践能力をそなえていることを求め、以下のディプロマ・ポリシーを定めている。このディプロマ・ポリシーの実現を図るために、教養科目、看護基礎科目、看護実践科目に定められた各科目の卒業所要単位数を満たして、総計127単位以上を修得し、専門分野・領域における知識・技能を踏まえて諸課題の解決を主体的に図る姿勢を有し、次に掲げる能力を身につけた者に学位を授与するとしている。

看護学部のディプロマ・ポリシーはアドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）に示した学力の3要素である「姿勢・態度」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」のそれぞれの視点から7項目が設定されている。なお、以下に示したものは2023年度までのディプロマ・ポリシー（旧ディプロマ・ポリシー）であり、現在、ホームページ上や学生便覧に掲載しているものは、新しいディプロマ・ポリシーである。

1) 旧ディプロマ・ポリシー

(1) 「姿勢・態度」

- ① 福音主義キリスト教精神に基づいた幅広い教養と豊かな人間性、高い倫理観を持ち、生命の尊厳を重んじた看護ができる。
- ② 看護を必要としている一人ひとりの意思と独自性を尊重できる。

(2) 「知識・技能」

- ③ 専門的知識と技能を習得し、エビデンスに基づいた基礎的看護を実践する能力を身に付けている。
- ④ 社会の動向と医療・看護の進歩と変化に適切に対応できる能力を身に付けている。

(3) 「思考力・判断力・表現力」

- ⑤ 知的好奇心をもって、主体的に問題を見つけ、考え、解決に向けて継続的に学習する能力を身に付けている。
- ⑥ 医療チームの一員としての自らの役割を果たすために必要な協働と連携能力を身に付けている。
- ⑦ 多様な文化と価値観を尊重し、国際的な視野から、健康課題を捉える能力を身に付けている。

2) 点検・評価

2023(令和5)年度 弘前学院大学 「卒業時アンケート調査」 実施結果報告書（以後、卒業時アンケート調査とする）の結果におけるディプロマ・ポリシーの「姿勢・態度」に関連する項目である「倫理観に培われた豊かな人間性」については、「身に付いた」を選択した学生の割合が54.0%、「どちらかというとな身に付いた」が42.0%で、合計96.0%の学生が身についたと自己評価していた。また「深く人間を理解する基礎的能力」についても、「身に付いた」を選択した学生の割合が60.0%、どちらかというとな身に付いた」が40.0%で、合計で100%の学生が身についたと自己評価していた。次にディプロマ・ポリシーの「知識・技能」の項目に関わる「看護実践能力」では、「身に付いた」を選択した学生の割合が46.0%、どちらかというとな身に付いた」が50.0%、合計で96.0%であった。ディプロマ・ポリシーの思考力・判断力・表現力に関連する項目である「教養」、「主体性」、「協調性」、「責任感」、「判断力」については、「身に付いた」と「どちらかといえば身に付いた」を選択した学生の割合は、どの項目も合計で90%を超えていた。これらの結果から、本学部の2023年度の卒業生は、ディプロマ・ポリシーを概ね達成できたと考えていることがわかる。

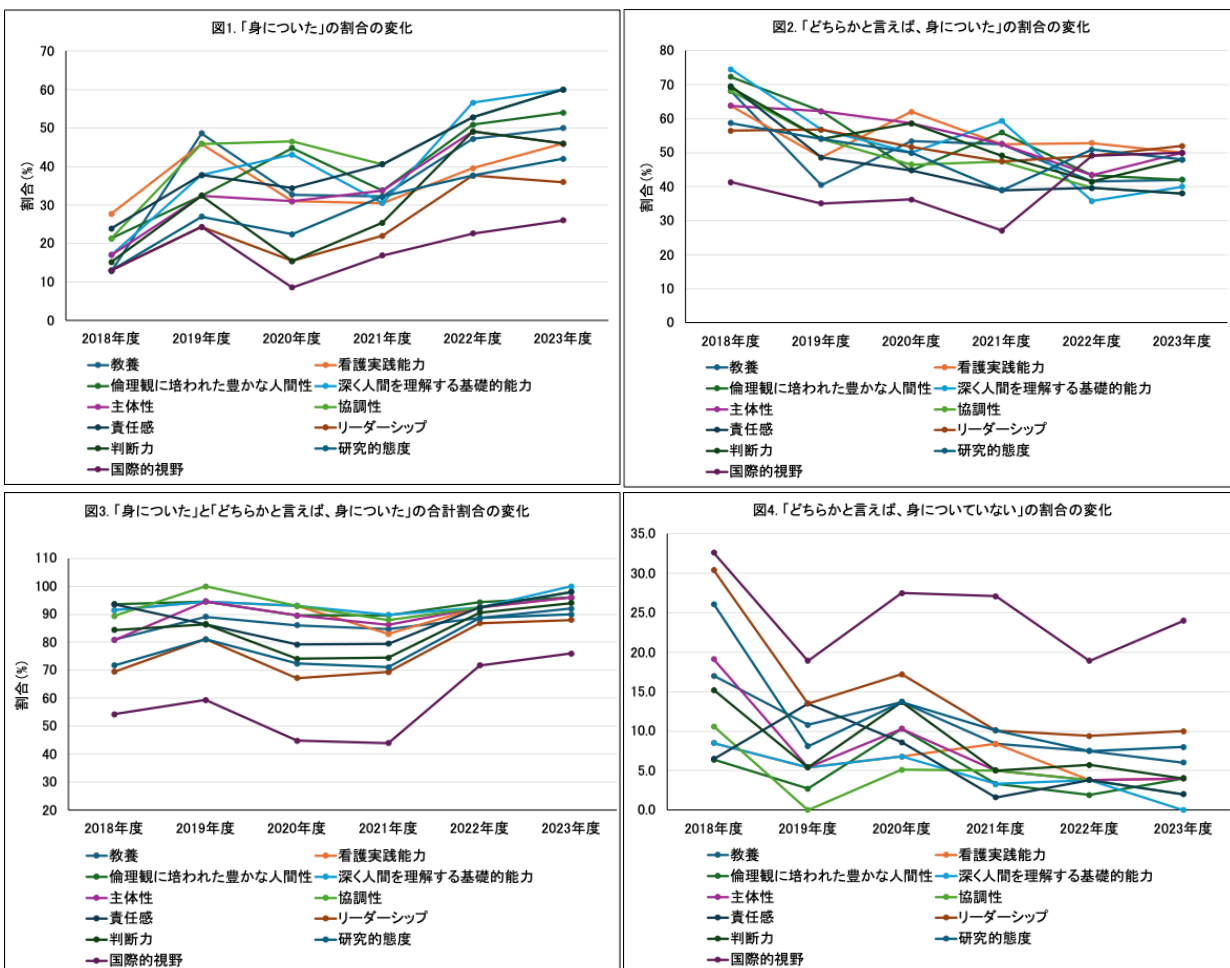
下に示した図1から4は、2018年度から2023年度までの卒業時アンケート調査の「知識・技能・能力などがどのくらい身に付いたと自己評価していますか」という質問項目で、「身についた(図1)」、「どちらかと言えば、身についた(図2)」、「「身についた」と「どちらかと言えば、身についた」の合計(図3)」、「どちらかと言えば、身についていない」の割合の変化を示したものである。「身についた」の割合は2018年度から2023年度にかけてほとんどの項目において増加傾向を示し(図1)、その一方で、「ど

ちらかと言え、身についた」はほとんどの項目において、その割合が低下している（図2）。また「身についた」と「どちらかと言え、身についた」の合計」は2018年度から2023年度にかけて、ほとんど変化していない（図3）。これらの結果は、2018年度から2023年度にかけて、知識・技能・能力などが身についたと考える学生が増加していることを示すものである。

「どちらかと言え、身についていない」（図4）は、多くの項目で減少傾向であるが、国際的視野については減少する傾向が認められないし、また2018年度から2023年度の平均値が24.8%で、他の項目と比べて高い。この理由については、看護学部のカリキュラムにおいて、国際的視野に関係する科目が少ないことが、「どちらかと言え、身についていない」を選択する学生の割合が多いことに繋がっている可能性が考えられる。この点に関しては、2024年度からの新たなディプロマ・ポリシーに、国際的視野に関連する項目を含めないように改善した。

3-2. 学修成果の測定およびその検証（資料：2023年度卒業時アンケート調査、2023年度学修行動・学修成果アンケート調査）

学修成果の評価指標としては「学位取得率」、「看護師国家試験合格率」、「卒業時アンケート調査」、「学修行動・学修成果アンケート調査」、「グレード・ポイント・アベレージ」など、いろいろな指標があるが、これらの指標の中でも「学修行動・学修成果アンケート調査」、「卒業時アンケート調査」、「看護師国家試験合格率」、「グレード・ポイント・アベレージ」の結果を示す。



1) 学修成果に関わる項目（資料：2021年度から2023年度の学修行動・学修成果アンケート調査）

「教育理念(建学精神)」については、「知らない」と「あまり知らない」を選択した学生の割合が昨年度と同様に約70%であった。教育理念(建学精神)は主に4月の在學生や新入生に対するオリエンテーションで説明している。また、新入生に対しては新入生リトリートでも説明している。しかし、特に在學生に関してはオリエンテーションの時間の都合上、十分に説明できる時間を確保することが困難である。この点については、教育理念(建学精神)を説明する時間などを含めて、今後さらに検討する必要がある。

「シラバスに記載されているC・P(カリキュラム・ポリシー)、D・P(ディプロマ・ポリシー)とは何か知っているか」については、「知らない」と「あまり知らない」を選択した学生の割合が2021年度は59.8%、2022年度は67.7%で、2023年度は70.4%で、「知らない」と「あまり知らない」学生の割合が増加傾向である。「教育理念(建学精神)」と同様に、十分に説明できる時間を確保することが困難であり、この点については、時間の確保などを含めて、今後さらに検討する必要がある。

「以前よりも幅広い知識や教養が身に付いたか」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が2021年度は88.2%、2022年度は77.9%で、2023年度は79.3%で、2021年度と比べて、2022と2023年度は約10%減少している。一方、「身に付いていない」と「あまり身に付いていない」を選択した学生の割合は、2021年度が10.8%、2022年度は18.5%で、2023年度は20.0%で増加傾向を示している。今後、「身に付いていない」と「あまり身に付いていない」を選択した学生の割合がさらに増加するのかどうかを確認していく必要がある。

「学習している外国語の、読む力、書く力、会話力は身に付いたか」については、「身に付いていない」と「あまり身に付いていない」を選択した学生の割合が、約50%かそれ以上であり、外国語に関しては、多くの学生が身に付いていないと考えている。

「レポートや論文の作成について、書くために必要なスキル(書式や作法など)」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が84.1%であり、昨年度(82.3%)と同様な割合であった。

「専門的な知識やスキルが身についたか」という質問に対しては、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が85.5%であった。2021年度が89.1%、2022年度が87.2%で、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合は、わずかに減少傾向にある。

「自ら学ぶ姿勢が身に付いたか」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が88.9%であった。2021年度が85.5%、2022年度が84.1%で、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合はわずかに増加している傾向にある。

「論理的に考える力が身に付いたか」は、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が、2021年度は84.2%、2022年度は79.7%で、2023年度は83.5%で、2021年度からは変化はない。

「分析力、課題解決能力が身に付いたか」は、2021年度が88.7%、2022年度が82.7%、2023年度が84.1%であった。一方、「身に付いていない」と「あまり身に付いていない」を選択した学生の割合は、2021年度が10.8%、2022年度が15.0%、2023年度が14.5%で、2022年度から増加傾向にある。

「批判的に考える力が身に付いたか」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が、2021年度は79.2%、2022年度は79.7%、2023年度は80.0%であった。また「身に付いていない」と「あまり身に付いていない」を選択した学生の割合は、2021年度が20.2%、2022年度が18.5%、2023年度が19.3%であり、変化はないと考えられる。

「企画・アイデアなどの創造力が身に付いたか」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が、2021年度は67.9%、2022年度は70.4%、2023年度は73.8%であった。一方、「身に付いていない」と「あまり身に付いていない」を選択した学生の割合は、2021年度が31.4%、2022年度が27.4%、2023年度が23.5%で、企画・アイデアなどの創造力が身に付いたと考える学生数が増加する傾向にある。

「日本語表現能力が身に付いたか」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が、2021年度は79.6%、2022年度は77.7%、2023年度は81.4%で、2021年度から変化は認められない。

「プレゼンテーション能力が身に付いたか」は、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が、2021年度は70.6%、2022年度が74.4%、2023年度が72.4%で、他の項目よりも「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択する学生の割合が少ない。また2021年度から変化は認められない。

「ディスカッション能力が身に付いたか」は、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が、2021年度は79.2%、2022年度が79.6%、2023年度が80.7%で、2021年度から変化は認められない。

「他者とのコミュニケーションを図って相互に理解し合う能力が身に付いたか」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が、2021年度は92.2%、2022年度は84.5%、2023年度は90.3%で、年度によって変動している。

「協働して物事を進める力が身に付いたか」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が、2021年度は90.0%、2022年度は88.7%、2023年度は93.8%で、3年間の平均が91.1%であり、年度による違いは認められない。

「協働作業などで、グループをまとめ上げる力が身に付いたか」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が、2021年度は77.0%、2022年度は76.5%、2023年度は80.7%で、リーダーシップが身に付いたと感じる学生の割合は2021および2022年度比べて、わずかに増加する傾向であった。

2) 学修行動に関わる項目（資料：2021年度から2023年度の学修行動・学修成果アンケート調査）

次に学修行動に関わる項目である。

「1週間のうち大学に何日登校したか」については、「7日」を選択した学生の割合が2021年度は8.1%、2022年度は6.2%、2023年度は9.7%、「5～6日」を選択した学生の割合は、2021年度が72%、2022年度が79.6%、2023年度が75.2%であった。週あたりの登校日数については2021年度から2023年度まで変化は認められない。

「授業に出席した割合」については、「80%以上」を選択した学生の割合は、2021年度が86.9%、2022年度が89.8%、2023年度が91%、「60～79%」を選択した学生の割合は、2021年度が6.3%、2022年度が5.8%、2023年度が8.3%であった。授業に出席した割合については2021年度から2023年度まで変化は認められない。

「興味・関心のある授業はどのくらいあるか」については、「80%以上」を選択した学生の割合は、2021年度が18.4%、2022年度が18.6%、2023年度が13.1%、「60～79%」を選択した学生の割合は、2021年度が39.6%、2022年度が34.5%、2023年度が44.1%であった。

「授業の難易度について、総体的にどのように感じていますか」については、「かなり難しい」を選択した学生の割合は、2021年度が6.3%、2022年度が5.8%、2023年度が4.8%であった。また「やや難しい」を選択した学生の割合は、2021年度が37.8%、2022年度が38.9%、2023年度が45.5%であった。「ふつう」を選択した学生の割合は、2021年度が50.4%、2022年度が48.7%、2023年度が45.5%であった。「かなり難しい」を選択する学生の割合は他と比べて低く、かつ2021年度が2023年度まで減少する傾向を示している。また「やや難しい」を選択する学生の割合はやや増加傾向であり、「ふつう」を選択する学生の割合はやや減少傾向である。

「授業に対して、積極的に取り組んだか」については、「かなり取り組んだ」と「よく取り組んだ」を選択した学生の割合の合計は、2021年度が43.6%、2022年度は46%、2023年度が53.1%で、2021年度から2023年度まで増加する傾向が見られた。「ふつう」、「やや取り組んだ」、「まったく取り組んでいない」を選択した学生の割合の合計は、2021年度は55.3%、2022年度は52.9%、2023年度は46.9%で、減少傾向であった。

「授業の予習を、自発的に、1週間でどのくらいしたか」については、「6時間以上」を選択した学生の割合は、2021年度が2.7%、2022年度は2.2%、2023年度が1.4%で、減少傾向である。「4時間半から6時間」を選択した学生の割合は、2021年度が5.8%、2022年度は7.1%、2023年度が8.3%であった。「3～4時間半」を選択した学生の割合は、2021年度が1.8%、2022年度は4.4%、2023年度が2.1%であった。「90分～3時間」を選択した学生の割合は、2021年度が29.2%、2022年度は30.1%、2023年度が30.3%であった。「90分未満」を選択した学生の割合は、2021年度が44.1%、2022年度は36.7%、2023年度が41.4%であった。「やっていない」を選択した学生の割合は、2021年度が15.7%、2022年度は17.7%、2023年度が16.6%であった。「90分～3時間」、「90分未満」、「やっていない」を選択した学生の割合の合計が、2021年度が89.0%、2022年度は84.5%、2023年度が88.3%であった。

「授業の復習を、自発的に、1週間でどのくらいしたか」については、「6時間以上」を選択した学生の割合は、2021年度が2.7%、2022年度は4.0%、2023年度が2.1%、「4時間半から6時間」は2021年度が5.4%、2022年度は5.3%、2023年度が0.7%、「3～4時間半」は2021年度が7.6%、2022年度は9.3%、2023年度が11%、「90分～3時間」は2021年度が33.3%、2022年度は27.4%、2023年度が31%、「90分未満」は2021年度が38.7%、2022年度は34.5%、2023年度が38.6%、「やっていない」は2021年度が11.7%、2022年度は18.1%、2023年度が16.6%であった。「90分～3時間」、「90分未満」、「やっていない」を選択した学生の割合の合計が、2021年度が83.7%、2022年度は80%、2023年度が86.2%であった。

「授業で、教員に指示された発表の準備、レポートや課題に費やした時間は、1週間でどのくらいか」については、「6時間以上」を選択した学生の割合は、2021年度が18.4%、2022年度は13.3%、2023年度が18.6%、「4時間半から6時間」は2021年度が13.9%、2022年度は19.9%、2023年度が17.2%、「3～4時間半」は2021年度が22.9%、2022年度は24.8%、2023年度が20%、「90分～3時間」は2021年度が33.6%、2022年度は28.8%、2023年度が37.9%、「90分未満」は2021年度が6.7%、2022年

度は9.3%、2023年度が4.1%、「やっていない」は2021年度が2.7%、2022年度は2.2%、2023年度が2.1%であった。

「アルバイト(1週間あたり)をどのくらいしているか」については、「25時間以上」を選択した学生の割合が、2021年度が2.7%、2022年度は3.5%、2023年度が2.1%、「20～24時間」は2021年度が4.9%、2022年度は4%、2023年度が5.5%、「15～19時間」は2021年度が4.5%、2022年度は11.9%、2023年度が13.8%、「10～14時間」は2021年度が11.3%、2022年度は13.7%、2023年度が18.6%、「5～9時間」は2021年度が25.2%、2022年度は11.9%、2023年度が12.4%、「5時間未満」は2021年度が5.4%、2022年度は8.4%、2023年度が5.5%、「なし」は2021年度が45.4%、2022年度は45.6%、2023年度が42.1%であった。1週間あたり10時間以上のアルバイトをしている学生の割合は、2021年度が23.4%、2022年度が33.1%、2023年度が40%で、増加する傾向にある。

「インターネット(LINE、SNSなども含む)を、1日どのくらい使っているか」については、「6時間以上」を選択した学生の割合は、2021年度が18.9%、2022年度は15.5%、2023年度が15.9%、「4時間半～6時間」は2021年度が16.2%、2022年度は19%、2023年度が18.6%、「3～4時間半」は2021年度が26.1%、2022年度は24.8%、2023年度が31%、「90分～3時間」は2021年度が28.3%、2022年度は29.6%、2023年度が25.5%、「90分未満」は2021年度が8.1%、2022年度は8.8%、2023年度が8.3%、「やっていない」は2021年度が1.8%、2022年度は0.9%、2023年度が0.7%であった。2023年度において、インターネット(LINE、SNSなども含む)を、1日3時間以上使う学生の割合は、65.5%であった。

2022年度以降の1年生前期の必修科目の総単位数は14単位であり、1週間あたりに必要な事前事後学修の時間は14時間である。また1年生後期は必修科目の総単位数が20単位、1週間あたりに必要な事前事後学修の時間は27時間である。2年生前期は必修科目の総単位数が15単位、1週間あたりに必要な事前事後学修の時間は18時間である。2年生後期の必修科目の総単位数は25単位、1週間あたりに必要な事前事後学修の時間は30時間である(資料:2023年度看護学部カリキュラム検討委員会資料)。授業で、教員に指示された発表の準備、レポートや課題に費やした時間があつたとしても、事前事後学修の時間が少ないため、事前事後学修を促す教育方法を考える必要がある。

3) 卒業時のアンケート調査の結果 (資料:2023年度卒業時アンケート調査)

卒業時のアンケート調査の結果における「学生生活全体を通じて、課題や試験の準備に真剣に取り組んだ」という質問に対して、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を選択した学生の割合が合計で96%であった。一方、「学生生活全体を通じて、授業の内容を十分に理解することができた」という質問に対しては、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を選択した学生の割合が合計で96%、「どちらかというともう思わない」と「もう思わない」を選択した学生の割合が合計で4%であった。また「学生生活全体を通じて、授業に対し、意欲的・積極的に取り組んだ」という質問に対しては、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を選択した学生の割合が合計で96%、「どちらかというともう思わない」と「もう思わない」を選択した学生の割合が合計で4%であった。

4) 国家試験合格率

国家試験については、国家試験対策委員会によって、学生の学習のサポートが行われている。

(1) 看護師国家試験合格率(新卒)

	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
	2019年度卒業生	2020年度卒業生	2021年度卒業生	2022年度卒業生	2023年度卒業生
	16N生	17N生	18N生	19N生	20N生
本学	89.5	96.9	93.9	88.7	79.4
全国平均	97.4	95.4	96.5	95.5	93.2

看護師国家試験合格率(新卒)は2021年度卒業生(18N生)以降に徐々に低下する傾向を示している。

(2) 保健師国家試験合格率（新卒）

	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
	2019年度卒業生	2020年度卒業生	2021年度卒業生	2022年度卒業生	2023年度卒業生
	16N生	17N生	18N生	19N生	20N生
本学	84.6	87.5	73.3	100	87.5
全国平均	96.3	97.4	93.0	96.8	97.7

保健師国家試験合格率（新卒）は、2021年度卒業生（18N生）と2022年度卒業生（19N生）を除き、85～88%である。

5) グレード・ポイント・アベレージ (Grade Point Average; GPA) の推移 (資料: 看護学部ホームページの GPA 制度(学修評価)の導入より抜粋)

(1) 18N生から20N生までの看護師国家試験合格率（新卒）と GPA の推移

GPA とは履修した科目の成績を平均値化したもので、学修の質を評価するものであり、学修成果・到達度を客観的・相対的に見ることが出来る指標である。成績評価（秀・優・良・可・不可）を成績値（グレード・ポイント、以下 GP と示す）に換算して GPA を算出する。秀の GP は「4」、優の GP は「3」、良の GP は「2」、可の GP は「1」、不可の GP は「0」である。以下の表は 18N 生から 20N 生の看護師国家試験合格率（新卒）と、GPA1 以上 2 未満の学生の割合、GPA2 以上 3 未満の学生の割合、GPA3 以上の学生の割合を示したものである。

	看護師国試合格率	GPA1 以上 2 未満	GPA 2 以上 3 未満	GPA3 以上
18N 生	93.9%	30.5%	63.5%	3.4%
19N 生	88.7%	32.0%	61.9%	5.6%
20N 生	79.4%	21.7%	73.7%	4.0%

18N 生と 19N 生の GPA1 以上 2 未満の学生の割合は、それぞれ 30.5%、32.0%であるのに対して、20N 生は 21.7%と減少している。一方、18N 生と 19N 生の GPA2 以上 3 未満の学生の割合は、それぞれ 63.5%、61.9%であるのに対して、20N 生では 73.7%と増加している。20N 生は 18N 生や 19N 生と比べて成績がよくなっているにも関わらず、看護師国家試験の合格率（新卒）は低下している。

(2) 18N 生から 23N 生までの各学年における各 GPA の学生数の割合 (%)

18N 生	1 未満	1 以上 2 未満	2 以上 3 未満	3 以上
1 年生	1.5	29.4	64.7	4.4
2 年生	3.0	31.3	62.7	3.0
3 年生	2.9	30.9	63.2	2.9
平均	2.5	30.5	63.5	3.4

19N 生	1 未満	1 以上 2 未満	2 以上 3 未満	3 以上
1 年生	0	23.7	69.5	6.8
2 年生	0	35.1	59.6	5.3
3 年生	1.6	37.1	56.5	4.8
平均	0.5	32.0	61.9	5.6

20N 生	1 未満	1 以上 2 未満	2 以上 3 未満	3 以上
1 年生	0	19.7	72.7	7.6
2 年生	1.5	22.7	72.7	3.0
3 年生	0	22.7	75.8	1.5
平均	0.5	21.7	73.7	4.0

21N 生	1 未満	1 以上 2 未満	2 以上 3 未満	3 以上
1 年生	3.8	11.3	73.6	11.3
2 年生	0	21.6	68.6	9.8
3 年生	0	22.4	67.3	10.2
平均	1.3	18.4	69.9	10.4

22N 生	1 未満	1 以上 2 未満	2 以上 3 未満	3 以上
1 年生	5.7	11.4	74.3	8.6
2 年生	6.5	24.2	66.1	3.2
平均	6.1	17.8	70.2	5.9

23N 生	1 未満	1 以上 2 未満	2 以上 3 未満	3 以上
1 年生	0	21.7	65.2	13.0

GPA1 以上 2 未満の学生の割合は、18N 生と 19N 生では約 30%であるのに対して、20N 生以降では約 20%であり、20N 生以降で減少している。GPA2 以上 3 未満の学生の割合は、18N 生と 19N 生では約 60%であるのに対して、20N 生以降では約 70%であり、20N 生以降で増加している。GPA3 以上の学生の割合は、18N 生と 19N 生では約 5%であるのに対して、21N 生以降では 10%を超える学年もあり、GPA3 以上の学生の割合が増加傾向である。GPA の上昇は、18N 生や 19N 生よりも優秀な学生が増加すること、または成績評価が甘くなることによって起こる。今後、看護師国家試験合格率と GPA の変化を注視していくことが求められる。

3-3. まとめと課題

【まとめ】

- 本学部の 2023 年度の卒業生は、ディプロマ・ポリシーを概ね達成できたと考えている。
- 2018 年度 (15N 生) から 2023 年度 (20N 生) にかけて、知識・技能・能力などが身についたと考える学生が増加している。
- 「教育理念(建学精神)」については、「知らない」と「あまり知らない」を選択した学生の割合が昨年度と同様に約 70%であった。
- シラバスに記載されている C・P(カリキュラム・ポリシー)、D・P(ディプロマ・ポリシー)を「知らない」または「あまり知らない」と回答する学生の割合が 2021 年度から 2023 年度にかけて増加する傾向がある。
- 「以前よりも幅広い知識や教養が身に付いたか」、「企画・アイデアなどの創造力が身に付いたか」、「プレゼンテーション能力が身に付いたか」を除く、多くの学修成果に関わる項目については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が 80%以上であることから、多くの学生はそれぞれの能力を身につけたと実感していると推察される。
- 幅広い知識や教養については、「身に付いていない」または「あまり身に付いていない」と考える学生の割合が、2021 年度から 2023 年度にかけて増加する傾向を示している。
- 外国語に関しては、多くの学生が身に付いていないと考えている。
- 企画・アイデアなどの創造力が身に付いたと考える学生数が増加する傾向にある。
- 「プレゼンテーション能力が身に付いたか」については、他の項目よりも「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択する学生の割合が少ない。
- 「授業の予習を、自発的に、1 週間でどのくらいしたか」については、2021 年度から 2023 年度まで、「やっていない」から「90 分～3 時間」を選択した学生の割合が 85%以上である。
- 「授業の復習を、自発的に、1 週間でどのくらいしたか」については、2021 年度から 2023 年度まで、「やっていない」から「90 分～3 時間」を選択した学生の割合が 80%以上である。
- 1 週間あたり 10 時間以上のアルバイトをしている学生の割合は、2021 年度が 23.4%、2022 年度が 33.1%、2023 年度が 40%で、増加する傾向にある。
- 看護師国家試験合格率(新卒)は 2022 年(17N 生)以降、低下している。

- GPA1 以上 2 未満の学生の割合は、18N 生と 19N 生と比べて、20N 生以降で減少している。一方、GPA2 以上 3 未満の学生の割合は、18N 生と 19N 生と比べて、20N 生以降で増加している。GPA3 以上の学生の割合は、18N 生と 19N 生と比べて、21N 生以降で増加傾向である。これらの結果は、18N 生と 19N 生よりも、21N 生以降の学生のほうが、成績が良いことを示している。
- 20N 生は知識・技能・能力などが身についたと考える学生が増加しており、また 18N 生や 19N 生と比べて成績がよくなっているにも関わらず、看護師国家試験の合格率（新卒）は低下している。

【課題】

- 教育理念(建学精神)とシラバスに記載されている C・P(カリキュラム・ポリシー)、D・P(ディプロマ・ポリシー)を「知らない」および「あまり知らない」学生の割合が多く、この点について今後、これらについて説明する時間を確保するなどのさらなる対策が必要であると考えます。
- 「以前よりも幅広い知識や教養が身に付いたか」については、「身に付いていない」と「あまり身に付いていない」を選択した学生の割合は、2021 年度以降に増加する傾向を示しているため、今後、この割合がさらに増加するのかどうかを確認していく必要がある。もし「身に付いていない」と「あまり身に付いていない」を選択する学生の割合の増加が続くのであれば、カリキュラムや時間割を見直す必要があると思われる。
- 2023 年度の「企画・アイデアなどの創造力が身に付いたか」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が 73.8%であり、他の項目と比べて割合が低いが、2021 年度から増加傾向にあるため、今後の推移を見守る必要があると考えます。
- 「プレゼンテーション能力が身に付いたか」に関しては、他の項目よりも「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が少ないため、プレゼンテーション能力が身に付く授業を行うことが必要かもしれない。
- 学習している外国語に関しては、多くの学生が身に付いていないと考えており、これも卒業時アンケート調査における国際的視野の自己評価が低いことにつながっている可能性が考えられる。
- 学修行動アンケートの結果からは、学生は事前事後学修を行う時間があることがわかる。2022 年度以降の 1 年生前期の 1 週間あたりに必要な事前事後学修の時間は 14 時間（1 日 2 時間 15 分、週 6 日）である。また 1 年生後期は 27 時間（1 日 4 時間半、週 6 日）、2 年生前期は 18 時間（1 日 3 時間、週 6 日）、2 年生後期は 30 時間（1 日 5 時間、週 6 日）必要であり、事前事後学修を促す授業、課題、試験の改善が望まれる。
- 知識・技能・能力などが身についたと考える学生が増加しており、成績もよくなっているが、看護師国家試験の合格率（新卒）は低下している。この原因について、GPA 以外の学修成果の評価指標も用いて検討する必要がある。

【資料】

- 1) 学生便覧
- 2) 2018（平成 30）年度から 2023（令和 5）年度 弘前学院大学「卒業時アンケート調査」実施結果報告書
- 3) 2021（令和 3）年度から 2023（令和 5）年度 弘前学院大学「学修行動・学修成果アンケート調査」実施結果報告書
- 4) 看護学部ホームページの GPA 制度(学修評価)の導入より抜粋
- 5) 2023 年度看護学部カリキュラム検討委員会資料
- 6) 2023（令和 5）学習サポート希望に関する調査（看護学部学務委員会）
- 7) 2023（令和 5）学習サポート企画・結果に関する調査(看護学部学務委員会)